
耳に残るは彼方の声【「雪切恋歌」番外編】

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

耳に残るは彼方の声【「雪切恋歌」番外編】

【Nコード】

N7896V

【作者名】

RAN

【あらすじ】

「ではその命を、私に預けることも、また一興、となりますか？」
破門された僧侶が道端で琵琶を弾いていると、青年に声をかけられた。

後に彼の人生に大きな影響を残すことになるとは知らず、僧侶の青年は声をかけた青年の手を取ることにする。

dノベ転載

「良い音色ですね」

「あ？」

琵琶を路上で弾いていた青年に、声をかけた人物がいた。

青年は、演奏を邪魔されたのが気に入らず、その人物を睨みつけた。

だが、その人物は笠をかぶっていて、よく顔は見えなかった。

法衣を着ているから、恐らく僧侶ではあると思われる。

「このような場所で、なぜ琵琶を弾かれるのですか？」

声をかけた人物がそう問うのももつともだった。

青年がいたのは、人通りの少ない森の獣道だったのだから。

「俺がここで琵琶弾こうが、俺の勝手だろ」

「私は、あなたは僧侶だとお見受けしたのですが？」

「……本当の僧侶が、こんな所にいると思うか？」

青年は、皮肉げに笑んだ。

「しかし、あなたは法衣に身を包んでおられる」

「俺は破門されたんだ。金も何も持っていない。裸で外に出すのだけはためらわれたのか、この法衣は与えてもらったがな」

「なるほど、そうでしたか。して、あなたはこれからどうなさるんですか？」

「どうも。もう俺は何に縛られることもないから、気の赴くままに生きていくだけだ。このままのたれ死ぬのも、また一興ってやつだ」

青年は、どこか自嘲的な表情を浮かべた。

先ほどの皮肉げな笑みに比べると、やや悲しげな色が濃くなった。すると、目の前の人物は、青年の前に腰を下ろし、笠を取った。

てつきり僧侶だと思っていたその人物の頭には、黒々とした髪があった。

そして、優しげな黒い瞳を持つ双眸を細めた笑顔が目の前に現れる。

青年は思わず、その双眸に惹きつけられた。

「ではその命を、私に預けることも、また一興、となりますか？」

「私は慧俊^{けいしゅん}。あなたの名前は何と言つのです」

僧侶と青年は、山奥の寺にいた。

青年は僧侶、慧俊について、ここまで来ていた。

「名前は、ない」

汚れていた衣服の代わりのものに袖を通しながら、青年は言った。何の感情の欠片もなかった。

「ないことないでしょう。元は仏門にいたのだから」

慧俊は、青年の着ていた着物をたたみながら言つ。

「前の名前は捨てた」

一瞬の沈黙が流れる。慧俊の手が少し止まった。

「……そうですか。ですが、名無しでいることはあまり良いとは言えません。名前がない、ということは、存在しないことと等しい。

自然と存在がもろくなります。悪いものに、弱いところをつかれやすくなります」

「じゃあ、あんたが俺に名前をくれよ」

青年はどこか挑戦的な眼差しで慧俊を見た。

衣をたたみ終えた慧俊は顔を上げ、その眼差しを受けた。

笑顔だったが、その笑顔にはどこか不思議な力があつた。

優しさをたたえつつ、裏には何か隠しているような、妖しさがあつた。

青年は、背筋に悪寒が走るのを感じた。

だが、その悪寒は妙な興奮を伴って、心地よく青年に響く。

「では、あなたはこれから無名、とでも名乗りなさい。名無しにはちよつどよいでしょう」

その笑顔からは似つかわしくない、何とも手厳しい言葉だった。

慧俊の寺で無名が過ごすようになって、数ヶ月が過ぎた。何事もなく、日々はのどかに過ぎていった。

だが、何も変わることがなかった。

無名は、あの拾われた時から、何も変化していない。

慧俊は、自分の思想を無名に説くことはなかった。

ただ、寺にある書物は勝手に見ていい、と言われた。

だが、書物なら前の寺でも見たことはある。

慧俊の寺は、言っては悪いが、前の寺よりは小さい。

ここにあるような本なら、だいたい手に取ったことがあるものだった。

無名も、仏門に入った当初は向学心に燃えていた。

だが、現実の寺は、理想とは違っていった。

向学心に燃える者はわずかで、だいたい貴族の出であったりしたので、平民出身の無名とは、どこか隔たりがあった。

そして、何より無名は孤児であることから寺に入った。

寺の雑用を任され、ろくに勉学に励むことが許されなかった。

だから、本を手に取れたのは、夜中にこっそりと僧侶の部屋に忍び込んだ時だけであった。

そのような生活は、不便なこともあったが、まだ我慢できたし、満足していた。

だが、我慢できないことがあったから、無名は破門された。

むしろ、自分から飛び出してきたのだ。

だから、今更この本から学ぶことはなかった。

所詮、これは本でしかなく、現実を変えることなどできない。

無名は思想というものには、ほとほと幻滅していた。

慧俊は、果たして無名に何をさせたいのだろう。

無名は全くもってわからなかった。

その曖昧に曇った心のまま、日々を過ごしていた。そのような心では、どんなに外が緑薫る爽やかな景色であっても、その鮮やかさに、曇ったフィルターがかかって、色あせて無名には見えていた。

しかし、そうして過ごしていく中でわかったことは、慧俊は坊主の格好をしているが、キリシタンであるということだった。

袈裟の懷に隠してあるのはキリストのモチーフがついた十字架であつたし、食事の前には感謝の祈りを捧げた。

キリシタンであることは珍しいことではなかった。

国の主でさえ、キリシタンであることが多かった。

また、西洋の文化に魅了された者もいた。

だが、そのような環境であるのに、なぜ彼は、坊主の格好をして、ただ一人の神に祈りを捧げるのか。

無名は率直にそう慧俊に聞いた。

すると、慧俊は、少しはにかんだような表情を見せた。

無名は、なぜ慧俊がそのような表情をするのか、ますますわからなかった。

同時に、彼にそのような表情をさせるのが何か、ますます気になった。

むしろ、無名は嫌な予感がしていた。

「私の師匠が、そういう人だったんです」

「……………その師匠ってのは、女なのか……………？」

慧俊の声音に、確信を持ちつつ、そうではないことを願いながら、無名は聞いた。

「……………ええ、まあ……………そうですね」

慧俊の言葉の空白があつた。

もしかしたら、無名の質問の意図を察したのかもしれない。

だが、彼はそれ以上何も言わなかった。

ただ

「今度、あなたも会ってみましょう」
そう言って、無名の返答を待たず、慧俊は部屋の奥に入っ
た。

恐らく、また聖書でも読んでいるのだろう。

彼は、暇があれば聖書を訳して、解釈を照らし合わせていた。

無名の返答を待たなかったのは、恐らく彼が断るだろうと思っ
たからだろう。

無理やりにも、連れていこう、ということか。

無名は悔しかったので、何も言わず、縁側に腰掛けたまま、ただ
黙って地面を睨みつけていた。

ただ、無名ははたと気づいた。

なぜ自分は、こんなにいらついているのだろう、と。

今日の無名は気分が重かった。

会ってみますか、と言われた後すぐに、慧俊の師匠に会う日取りが決まった。

慧俊の策略としか、無名には思えなかった。

彼は、自分の師匠に会わせて、無名をどうしたいのだろう。

無名は、朝からイライラしていた。

慧俊の寺も山奥だが、慧俊の師匠、確か慧俊が伶明れいめいと言っていた、その寺はさらに山奥にあった。

人を寄せ付けない雰囲気をもった、鬱蒼とした森に囲まれた場所だった。

無名は、寺に近づいた時から、何となく落ち着かない感じを覚えていた。

そして、今日の前には、伶明と思しき尼の格好をした人物がいる。慧俊の師匠というには、若い印象を受けた。

しかし、その面差しは、優しげで落ち着いていた。

森に入った時は、取り込まれそうな怖い印象を受けたが、この人物は、その森にふと差し込む温かい日の光のように、落ち着く空気をまとっていた。

この寺だけが、森の中の光のようだ。

彼女には、人を惹きつけてやまない、不思議な魅力があった。

恐らく、慧俊もそれに惹かれているのだろう。

彼女が口を開く前に、無名は悟ってしまった。

「貴方が無名、ですか」

伶明が口を開いた。

その声音も、外見と同じように、柔らかく落ち着いたものだった。聞いているだけで、何だか懐かしさにも似た、切ない気持ちにさせられた。

「……………」

無名は、そう感じたのが悔しく、返事は返さず、ただ伶明を無言で睨んでいた。

「慧俊に聞いたとおり、気性の激しい人のようですね」

「私が至らないばかりに、お恥ずかしい限りです」

慧俊が、無名の横から言う。

その顔は、普段は見せないような、とろけそうなほど嬉しそうな笑みを浮かべていた。

無名は、ますます気に入らないように、顔をしかめた。

慧俊は、それに気づき、苦笑いを浮かべた。

伶明は、相変わらずそのままの笑顔で、無名を見ている。

まるで、かわいい子供を見ているような目だ。

「何を恥ずかしいことがありますか。久々に骨のある子がきたようですね。とても話しいがいます。慧俊、あなたさえよければ、この子を少し私の所に預けてもらってもいいでしょうか」

「は、はい。それは、ぜひ……………」

普段の落ち着いた慧俊からは想像できない動揺ぶりだ。

無名は、もう腹が立つというよりは、逆に冷めていた。

無名は、何も言わなかったので、結局伶明の所になっていることになった。

今度は、伶明との、さらに静かな山奥での生活が始まる。

無名が、有無を言わず、伶明の寺に世話になることになって、

数日が経過した。

やっていることは、慧俊の所にいた時と、何ら変わりない。ただただ流れていく日々だった。

だが、たまに無名は聖書を読むようになった。

伶明は、無名の横に座り、無名が顔を上げると、どう思った、私はこう思う、など、話しかけてきた。

慧俊は何も言わなかったが、伶明は話しかけてくる人だった。

それも、うざったくはなく、何となく馴染むのが不思議だった。

「それじゃあ、今日はここまでにしましょうか」

今日も聖書を読んでいると、伶明はそう言った。

気づくと、日が傾いていた。

「あなたはとても勉強熱心ですね」

「それしか、できないですから」

無名も、伶明には乱暴な言葉が使えず、丁寧な口調になっていた。

そして、無名の言葉に、伶明は真剣な表情になる。

だが、すぐに笑顔に戻る。そして、ちやかすように言った。

「あなた、慧俊のことが好きでしょう？」

「は?!」

無名は思わず裏返った大声をあげてしまった。

その反応がおもしろかったのか、伶明は楽しそうに笑っていた。

無名は、赤い顔を澁くして、伶明を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7896v/>

耳に残るは彼方の声【「雪切恋歌」番外編】

2011年8月15日03時31分発行